

## 〔34〕 W.フォーサイス振付『ALIE/NA(C)TION』

### 破壊の先の創造

1995年10月13日 東京新聞 夕刊

ウィリアム・フォーサイスのバレエを見るときは、ちよつと緊張する。事前の情報では肝心なことが分からないことが多いからだ。劇場でも精神を集中していないと、終わったあとちよつと混乱する。理屈や仕掛けが多いのだ。

たとえば今回の作品の題名の『ALIE/NA(C)TION』。邦題は『エイリアン―異邦人・その行動』だが、さんざん頭を悩ませた末の訳語にちがいない。確かにそうも読める横文字ではあるが、しかしそれ以外の読み方も可能である。切らずに読み流せば「疎外」とか「精神異常」の意味とも取れる。事実この作品がバリで上演されたときは、そう読まれていたそう。また斜線のところで前後に分ければ、「がひとつ足りないものの前半部分の「ALIE」が「連合せよ」で、後半部分の「NATION」が「民族」だから、「民族を連合せよ」となる。

しかしそういう幾つもの意味が見えるのは、この三幕からなるバレエを見たあとのこと。まずは白紙の状態で緊張する。この緊張がすでにしてとてもフォーサイスだと思いつながら。

開演前、幕はもう上がっていて、舞台上でダンサーがウォーミング・アップのように動いている。初老の男が数をかぞえ始めてスタート。六十まで数えて「一分」。つまり心臓の鼓動と同じテンポだ。そのようにして「二十六分」までいくのが第一幕である。

ダンサーたちは各自かかってに踊っている。背筋がねじれるような、関節がはずれそうなフォーサイス

## 〔34〕 W.フォーサイス振付『ALIE/NA(C)TION』

### 破壊の先の創造

1995年10月13日 東京新聞 夕刊

独特のその動きには、私たちはすでに多少なじんではいる。しかし全員がばらばらに動いていては、どこを見ていいのか分からない。一人一人にはそれなりの流れがあるのだが、全体としては無秩序そのもの。まあ、好きな時に好きなものを見よう、そう思った途端、私の心に奇妙な自由が広がった。

皆がそれぞれに自分自身でいる。それを上から統合しようとする確固たる原理はどこにもない。そのアナーキーな状態はまさしく現代だと言えないだろうか。眼に見えない侵入者にたいする不安とも取れる動きの連鎖のはてに「燃え上がるあなたが見たい！」という一人の男の絶叫で、第一幕は幕。

第二幕は中央で踊る一人の男と、それを見守る人々。男に挑発されたように一人立ち二人立ってヴォリュームが大きくなる。最後に立った二列の男女は、女はトウシューズで、動きも平凡なクラシックである。それが少しずつ動きを崩していく。伝統的なクラシック音楽とアメリカ風ソウル・リズムが交錯し、しだいに過激になっていくトウシューズのダンサーたちは、やがて完璧なフォーサイス・スタイルで踊っているのだった。それはクラシック・バレエの延長線上にありながらしかもそれから完全に離反した、現代バレエの新しいメソッドである。アメリカ生まれのフォーサイスがヨーロッパの伝統バレエをいかに改造したか、それを如実に示すものでもあった。

フォーサイスは、現代にあって何を踊ることができるか、いかに踊ることが可能か、それを追究して

## 〔34〕 W.フォーサイス振付『ALIE/NA(C)TION』

### 破壊の先の創造

1995年10月13日 東京新聞 夕刊

いる舞踊作家である。その方法論は、一見破壊的な試みのなかに新しい創造の道を探った実験的な小説家たちに通じるものがある。彼によれば、真に創造的に踊るためには、自分をたえず既成のものから「疎外」し、「錯乱」のなかで「行動」を、また「民族」を「融合せよ」ということになる。それがまさしくタイトルの意味するところだ。

第二幕の幕切れは「私は催眠術師にはなりたくない」という垂れ幕。人を思考停止に導くような芸術は望まないということだろうか。

最後の第三幕で展開されたのは、ふしぎな調和にみちた世界だった。「すべてはうまくいくだろう」というオプティミスティックな台詞で始まった舞台は、その文章の部分を少しずつ変えていく言葉あそびにつれて、二十六人のグループによる踊りが繰り広げられる。そこには第一幕とは打って変わって大きな統一感がある。関節が外れたような動きが完全に制御されて、ほとんど古典的な美を感じさせる一方で、クラシックなメソッドによる動きがかつてないほど独創的で斬新に見えてくるのである。

すべてが激しく逸脱しているなかでのこの調和をいったい何と表現したらいいだろう。

最後に読まれるゲーテの詩句「どうしてこんなに多くの感覚があるのだ」に言いつくされているが、私自身の単純な感想を言えば、この第三幕こそは何度でも見たいと思わせる魅力がある。

それにしてもフランクフルト・バレエ団は、フォ

## 〔34〕 W.フォーサイス振付『ALIE/NA(C)TION』

### 破壊の先の創造

1995年10月13日 東京新聞 夕刊

ーサイスの動きを何とみごとに修得してしまったことか。数年前には未熟なぶん刺激的だった。が今回は、おどろくほど滑らかである。要するにフォーサイスは二十世紀の新しい古典として根を生やしたのだ。

三幕のあいだじゅう、ときどき幕がゆつくりと下りてはまた上がった。空間の終わりと、その繰り返しのなかに一種の永遠を感じて、絶えず様相を変えつつも脈々と流れつつけるバレエの歴史を思ったのは、私一人であろうか。